

「武器なき闘い」

1960年製作 モノクロ シネスコ 140分

監督 山本薩夫
脚本 依田義賢 山形雄策 原作 西口克己
製作 角正太郎 伊藤武郎
撮影 前田 実 美術 久保一雄
音楽 林 光 録音 安恵重遠 照明 田畑正一 編集 河野秋和

「出演」

下元 勉 渡辺美佐子 東野英治郎 細川ちか子 中谷一郎 谷育子
小谷悦子 小沢昭一 岸 輝子 宇野重吉 山本 學 齊藤美和

「解説」

4月19日、「共謀罪」が審議入りした。過去3回も廃案になったものを、オリンピック、パラリンピックを迎えるには必要といているが、相談しただけで罪になるという国民監視、密告社会をあおる法案であり、戦前の「治安維持法」に重なる悪法といえる。

この映画は、暗黒の時代に抗し、いのちをかけて闘い、1929年「治安維持法改」改悪に議会でただ一人、反対演説をしようとした前の晩、神田の旅館で、右翼の凶刃に倒れた労農党代議士山本宣治の生涯を描いたもの。没後30周年に、関西の労働組合、農民、革新政党が協力し、製作委員会を立ち上げ、資金集めに苦労しながら完成させた。折しも、1960年、安保反対闘争のまっただ中、スタッフ、キャストも、撮影の合間を縫って、デモに積極的に参加した。

まさに、時代の風をうけての撮影だった。本作品の公開寸前に、日比谷公会堂で、選挙演説中に浅沼稻次郎社会党委員長が壇上で、右翼の少年に刺殺されるという衝撃的事件が起こり、山宣の生きた時代と重なり、人々に警鐘を鳴らす結果となった。

モノクロながら、ラストのシーンは、カラーで撮影されている。山宣のたたかいが、戦後の新しい時代に引き継がれるとの思いを込め戦前と違うカラーで描きたかったといわれている。ラスト、山宣の墓前に赤旗がへんぼんと翻る。だが、モノクロだと黒く映ってしまう。何としても色鮮やかな赤旗がイメージとして必要だったが、カラーネガを買う資金がない。映画人たちによびかけ、作品の意義に賛同した仲間たちが、端尺（撮影の時、一巻のネガフィルムから少し残る）を少しずつ送ってくれたおかげで、念願のカラー撮影が実現した。

「物語」

1928年（昭和3年3月15日）、治安維持法の名の下、35道府県の進歩的な運動家ら1600余を検挙し、厳しい拷問を加えた。いわゆる「3.15事件」である。京都、同志社大学で教壇に立っていた生物学者 山本宣治は、新しい考え方による性教育の必要を痛感して、教室で講義をしたり、労組の集まりで、産児制限の講演をおこなったりしていた。

だが大学当局や政府筋は、彼の行動を妨害した。同志社大学を追われた、山宣は、自分の生物学者としての考え方を世に広めるには、政治を変えなければと、労農党の運動に加わる。

佐山村の農民争議では小作人や共産党員たちに出合い社会変革により深くかかわっていく。

1928年、普通選挙に京都二区から出馬し、選挙干渉と弾圧を退け、当選する。政府は、治安維持法を改悪しようとする。本会議場で、ただ一人反対演説を行うことを決意する。宇治の自宅に立ち寄り、妻や子供たちに優しい声をかける山宣は、やさしい父の顔をみせていた。

議会の前の晩、神田の旅館で演説の準備をしていた山宣は、訪ねてきた右翼の凶刃に倒れる。

やがて、侵略戦争は、敗戦によって幕を閉じた。初めて赤旗にかこまれた山宣の命日に、大勢の人たちが集まった。中には、かつて山宣の生き方を批判した学生の姿もあった。

墓碑には、「山宣ひとり孤壘を守る。だが私はさびしくない。背後には大衆が支持しているから」ときざまれていた。闘いは、地下水脈を流れ、確実に戦後にひきつがれていった。